

大学生生活充実度の時点間分析

－「学生生活実態調査」（全国大学生生活協同組合連合会）を用いて－

○浜島 幸司（立教大学）
○谷田川 ルミ（芝浦工業大学）
武内 清（敬愛大学）

1. はじめに

大学は学生たちにさまざまな機会を提供している。在学期間（4～6年間）には、専門知識や技術を媒介にした教育・研究活動、卒業後の進路形成に必要とされる思考および時間（ときには猶予）、キャンパス内外での新たな出会いなどがある。これらの機会を、大学生たちはどのように利用し、感じているのだろうか。

言い換えれば、今の世代は、大学キャンパスをどのように利用し、学生生活に充足感を得ているのであろうか。この問題関心に対し、浜島・谷田川（2012）では、大学（＝学生）生活の「充実度」という側面から、全国大学生生活協同組合連合会が実施している「学生生活実態調査」の2011年データを分析し、報告した。

分析の結果、2011年の大学生の充実度の実態と、その規定要因を明らかにすることができた。しかし、過去の時点と比べて、大学生の充実度がどのようなものであるか、時点間比較の視点が不足している。そこで、本報告では充実度の時点間比較を加えたデータ分析をおこなう。

大学生生活の充実度は本報告の主要な概念であり、分析指標となる。ここに焦点をあてた先行研究は、すでにいくつかなされている。たとえば、本田（2002）は『満足度』と『充実度』の間には、微妙ではあるが重要なニュアンスの違いがある。『満足度』は、自分の外部にある環境の構成要素に対する受動的・客観的な評価という性格が強いのにに対し、『充実度』は自らの主体的な参加の度合いに関する評価をも内包した、より総合的な指標であると考えられるからである。それゆえ学生生活の質を問題にする際には、『満足度』よりも『充実度』という切り口の方が適している」（本田、2002：111）と述べ、2000年の全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査」データを分析している。他にも、佐野（2005）は、充実度を従属変数に消費生活との関連性を複数調査回（1991年、1996年、2000年）の同じく「学生生活実態調査」データを用いて、分析している。

このように充実度に注目した分析がなされているものの、2000年のデータを用いて分析と報告は一段落している。その後の浜島・谷田川（2012）では、2011年のデータを用いた分析となっており、2000年代の大学生の充実度の実態および規定要因は明らかにされて

いない。

とりわけ、2000年代に入ってから大学教育改革の動きは大きく、「学生中心の大学（2000年の文部科学省の広中レポート）」のスローガンのもと、多くの大学で教育改革が行われた時期でもある。さらに18歳人口の減少、大学進学率の上昇、初等中等学校段階の学習量の減少などの影響で、入学してくる大学生の質もたとえば、武内（2005、2007、2009、2010）らの一連の調査報告にあるように大きく変容しているものと思われる。

こうした状況を鑑みるに、先行研究の分析枠組みを踏襲しながら、2000年代から2011年に至る大学生の充実度の関係を比較し、検討する必要がある。

2. データの概要

分析に使用する調査データは、全国大学生生活協同組合連合会（Univ.co-op）が実施している「学生生活実態調査」の個票データである（大学院生の回答は除く）。大学生協のある全国の大学から相当数の学生回答を得ており、学生生活の実態を知るうえで有効である。

本調査は、1963年より毎年実施しているが、本報告で使用するデータは、「2004年（第40回）」、「2008年（第44回）」、「2011年（第47回）」の3回分とする。8年間の大学生生活の充実度の実態と比較をおこなう。調査時期は、各回とも10～11月である。上記の回を選んだ主要な理由は、2004年以降、学生生活の充実度の項目とともに、授業や大学生活に関して経年比較が可能な項目が用意されるようになったことにある。2004年と2011年の中間的な調査年ということで、今回は2008年のデータを使用することにした。

また、3回分の調査データを比較するため、対象大学を3回とも実施している大学とし、抽出した⁴⁾。今回対象となった大学は国公立立合わせて43校である。

データの特徴について触れておきたい。実施主体と関わる大学生協が存在する大学は、国公立および設立年数の古い私立大学に偏る傾向がある。大学入学ランクとして中より上に位置する大学生のデータが多い。さらに、3回の調査にすべて回答している大学に分析対象を限定したことで、大規模かつ大学入学ランクとして上に位置する大学生のサンプルとなっている。

分析サンプルの総数は、「2004年（第40回）」は

10300名、「2008年（第44回）」は11669名、「2011年（第47回）」は11998名である（表1）。

表1 各回 大学類型別^②・性別・学部別・学年別割合

セル内は%		2004年	2008年	2011年
大学類型別	旧帝国大学	19.3	19.9	20.0
	大都市総合私大	19.5	20.7	15.2
	他の国公立大	44.7	43.5	46.6
	他の私立大	16.6	15.9	18.3
性別	男性	53.1	54.8	55.0
	女性	46.9	45.2	45.0
学部別	文科系	44.1	45.4	43.2
	理科系	45.2	43.9	45.1
	医歯薬系	10.7	10.7	11.7
学年別	1年	32.0	29.3	30.8
	2年	25.0	25.8	24.1
	3年	22.9	22.9	22.3
	4年以上	20.2	22.0	22.8
N(100.0)		10300	11669	11998

3. 分析モデル

分析は以下のように進めていく（図1）。

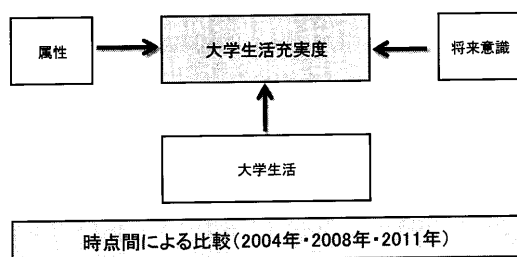
まずは2004年、2008年、2011年のデータより、学生生活充実度の回答状況を提示する。

その後、属性による分析、学内外での活動状況との関連の分析、人間関係満足との関係など、二変量（クロス分析）関係をみる。

次いで、多変量解析（重回帰分析）を用いて、学生生活充実度の規定要因について考察する。

3回の調査データの結果を比較し、各時点の特徴および現在に至るまでの特質について考察する。

図1 分析モデル



4. 大学生生活の充実度の時点間比較

(1) 各時点における充実度の回答傾向

表2が、2004年、2008年、2011年の学生生活充実度の回答状況である。「充実している（「まあ充実している」を含めた）」割合は、2004年で79.1%、2008年で83.0%、2011年で85.9%となっている。回を追うごとに、充実度は増えてきている。すでに、2004年時点で8割の大学生が充実した学生生活を送っていると回答していることがわかる。

表2 各回 大学生生活の充実度回答割合

学生生活の充実度(%)	2004年	2008年	2011年
充実している	22.4	27.7	28.2
まあ充実している	56.7	55.3	57.7
あまり充実していない	16.3	11.4	10.2
充実していない	3.2	2.1	1.9
無回答	1.4	3.6	2.1
N(100.0)	10300	11669	11998

(2) 属性別にみた充実度

図表は省略したが、各回とも「大学類型別」、「学年別」で差異はみられない。「学部別」では、各時点とも「医歯薬系」の学生の充実度が高い。「性別」では各時点とも「女性」のほうが、「男性」よりも充実度が高い。

(3) 大学生生活・授業・人間関係と充実度

図2は、「部・サークル加入別」に各時点の充実度の回答割合を比較した。各時点とも「現在加入している」学生の充実度が高い。図3は、「授業全般に満足している」かどうか尋ねた項目のうち「とてもそう思う」と「そう思わない」の回答を取り出し、各時点の充実度を比較した。各時点とも充実度に隔たりがみられる。図4は、「学科やクラスの人間関係に満足しているか」どうかを尋ね、図3と同様に図示したものである。人間関係に「満足」回答者の充実度が高い。

図2 各回 「部・サークル加入別」 充実度

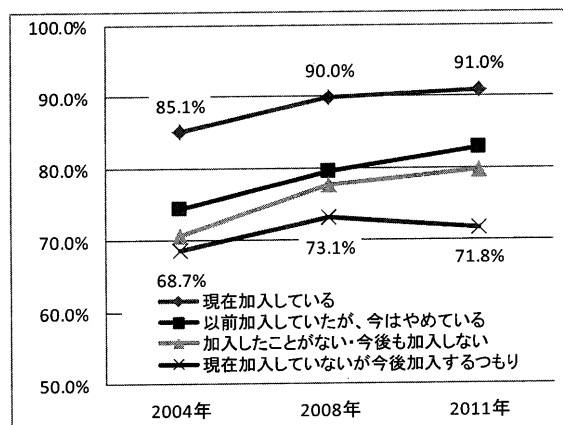


図3 各回 「授業全般満足別」 充実度

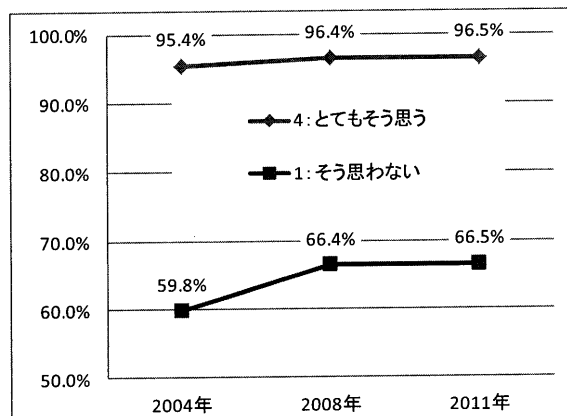
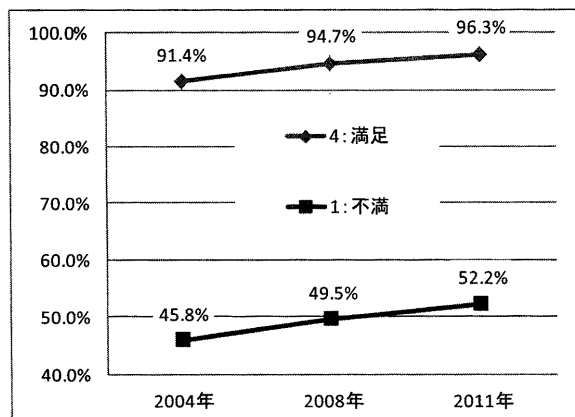


図4 各回 「学科やクラスの人間関係満足別」 充実度



5. 大学生生活の充実度を規定する要因

続いて、大学生生活の充実度はいかなる要因によって規定されているのかについて、2004年、2008年、2011年の3時点のデータを用いて重回帰分析を行って確認する。ここから、各年度における大学生生活の充実度の規定要因を明らかにするとともに、2000年以降の大学生生活の充実度を規定する要因の変化を確認する。分析結果は、表3に示した。

(1) 各時点における充実度の規定要因

① 2004年

2004年においては「女性」であること、「高学年」であること、「第一志望の大学」であることが大学生生活の充実度を高めている。「サークル」や「アルバイト」などを行っていること、「登校日数」が多いこと、「面白い授業」や「幅広い知識を得られる授業」も充実度を規定する要因となっている。また、人間関係に関する項目や将来「就きたい職業のための努力」をしていることも充実度を高めている。一方、大学内の「スポーツ施設」、「ラウンジ」、「コンピュータールーム」といった一人で利用することの多い施設に満足していることは充実度に対してマイナスの効果を示している。ここから一人で行動するよりも、仲間がいるということが大学生生活の充実度を規定しているという傾向を読み取ることができる。

② 2008年

2008年については2004年よりも人間関係に関する項目の規定力が高まっている傾向がみられる。また、将来「就きたい職業のための努力」についても同様の傾向がみられている。2008年の調査時点（2008年10～11月）は、「リーマン・ショック」直後の時期でもあるため、就職に対する意識が一層高まっていると考えられる。他方で「授業」に関する項目の規定力がやや弱まっている傾向も確認できる。

③ 2011年

2011年においても、人間関係と大学生生活（サークル、アルバイト、登校日数）の規定力は強いままとなっている。一方、性別と学年の効果はみられなくなり、代

わって「旧帝国大学」以外の大学類型（「大都市総合私大」、「その他国公立」、「その他私大」）であることが大学生生活の充実度にプラスの効果を示している。また、「校舎・教室」、「食堂」といった大学の施設への満足も充実度を高める要因となっている。

(2) 2000年代における充実度を規定する要因の変容

2004年、2008年、2011年の3時点における大学生生活の充実度の規定要因の変容をみると、3時点に共通する規定要因としては「サークル」、「アルバイト」などの活動や大学内における人間関係が良好であること、将来「就きたい職業のための努力」を挙げることができる。とりわけ人間関係の項目の係数に注目してみると、2004年から2008年の間で充実度への効果が高まっている傾向がみられている。また将来「就きたい職業のための努力」も同様のことがいえる。

2011年になると、私立大学や地方国立大学といった大学類型が充実度にプラスの効果を持ち始める。また、それまでの時点で確認されていた「高学年であること」の効果が消えている。これらの現象は、2000年代半ば以降における全国の大学、とりわけ小規模大学や地方国立大学などにおいて入学者獲得と大学教育の改善に力を入れてきた結果とも読み取れる。加えて、初年次教育が盛んに行われ、1年生に対するケアに各大学が積極的になった時期でもあり、1～2年次の段階から大学生生活に充実感を得ている可能性も考えられる。

3時点における大学生の大学生生活の充実度の変容からは、人間関係、施設設備といった項目の重要性を確認することができる。加えて、この10年間において各大学がソフト面、ハード面両方に対する改善を行い、それが学生に評価されてきた様子がうかがわれる結果となっている。

6. まとめと考察

2000年代の大学生の充実度は、年々微増している。2004年で8割と高い。「大学生生活総充実」時代に入りつつある。ただし、「まあ充実している」割合が50%あまりを占めている。「相当」充実しているかどうかは、今後の課題である。また、多くの大学生が「充実」している陰で、中退率の高さも指摘されており、「大学生生活総充実」現象は、楽観視できない側面もある。注意深く調査分析を重ねる必要があるだろう。

充実度をもたらす要因としては、「属性」だけでなく、「大学生生活」、「将来意識」が大きく関わる。とりわけ「大学生生活」には様々な局面があり、「サークル」や「アルバイト」などの活動、人間関係、諸局面での意識・態度と強く関連してくる。「授業」といった大学教育の中心ともいえる活動の重要性はいうまでもないが、それ以上にこうした生活全体に対する満足度、評価の高さが、彼らの大学生生活を充実させている。

学生たちにとって、異なる他者の集まりであるキャンパスは、コミュニティ（共同生活空間）となりうる。

学生がどのように居場所を得て過ごしていくかは、コミュニティ内での生存戦略としてきわめて重要である。

浜島・谷田川 (2012) は、2011 年データ分析から、充実した大学生を送る学生は「遊び」と「学業」を両立していることに触れたが、今回の分析より、この傾向は 2004 年から形を変えつつ継続していることが

確認された。現代の大学生は、自らの置かれた状況と将来を考えながら、複雑な社会を生き抜く方策として、こうした点を踏まえて、今後、有益となる大学教育のあり方を考えていく必要があるだろう。

※詳細は、当日配布するレジュメをご参照ください。

表 3 大学生生活の充実度を規定する要因 (3 時点) 重回帰分析

		2004年	2008年	2011年
		B	B	B
属性	性別ダミー (女子=1/男子=0)	.068 **	.026 **	-.005
	学年 (1~4年)	.048 **	.033 **	.004
	学部・系統 (参照: 文科系)			
	理科系ダミー	-.004	.020	-.005
	医歯薬系ダミー	.000	-.010	.001
	大学類型 (参照: 旧帝国大学)			
	大都市総合私立大学ダミー	.019	.007	.040 **
	その他国公立大学ダミー	-.026 *	-.023	.027 *
	その他私立大学ダミー	-.015	-.025 *	.027 *
	今の大学は第1志望か	.034 **	.011	.039 **
	今の学部は第1志望か	-.011	.000	-.007
	入試形態 (一般入試=1/推薦など=0)	-.015	.002	.009
大学生生活	通学形態 (自宅=1/自宅以外=1)	.002	-.009	-.006
	サークル加入	.164 **	.148 **	.107 **
	アルバイトの有無	.019 *	.043 **	.037 **
	登校日数	.073 **	.061 **	.043 **
	暮らし向き	.073 **	.037 **	.034 **
授業	おもしろい授業がある	.106 **	.070 **	.051 **
	幅広い知識が得られる	.042 **	.015	.021 *
	専門的な知識が得られる	.018	.015	.016
	少人数・ゼミ形式の授業がある	-.034 **	.010	.000
	先生が授業に熱心	-.020	.011	.019
施設設備	校舎・教室	.003	.014	.038 **
	図書館・図書室	.000	.007	.002
	コンピュータールーム	-.026 *	.001	-.002
	食堂	.019	.005	.030 **
	書籍・購買部	-.022	.025 *	.000
	サークル活動の場・広場	.014	.008	.021
	スポーツ施設	-.042 **	-.017	-.018
	多目的ホール・ラウンジ・会議室など	-.049 **	-.015	-.025 *
	大学周辺の環境	.039 **	.053 **	.029 **
人間関係	学科やクラスの間関係	.144 **	.138 **	.110 **
	部やサークルの間関係	.031 **	.080 **	.059 **
	異性との出会いや交際関係	.074 **	.119 **	.095 **
	先生との関係	.001	.030 **	.019
	大学職員の対応	-.074 **	-.041 **	-.050 **
	今の学部・学科に入ったこと	.228 **	.183 **	.118 **
	相談相手の有無	-.060 **	.096 **	.067 **
将来意識	就きたい職業のための努力	.057 **	.084 **	.085 **
	調整済みR2乗	.228	.283	.164
	F値	77.571	109.181	62.11
	有意確率	.000 **	.000 **	.000 **
	N	9,613	10,147	11,517

従属変数: 大学生生活の充実度

【注】

- (1) 浜島・谷田川 (2012) では、2011 年に実施回答した全データ (77 大学の 16885 名) で分析している。
- (2) 大学類型は、本田 (2002) の方法を踏襲して作成した。

【参考文献】

- 浜島幸司・谷田川ルミ 2012 「大学生生活の充実度の分析」『バブル崩壊後の学生の変容と現在学生像』, 全国大学生生活協同組合連合会広報調査部編, pp.48-66.
- 本田由紀 2002 「大学生生活が充実していないのは誰か」『全国大学生生活協同組合連合会「学生生活実態調査」の再分析 (1991~2000 年)』, 東京大学社会科学研究所データアーカイブ (SSJDA) リサーチペーパーシリーズ 23, pp.111-124.
- 佐野秀行 2005 「学生の消費生活の推移と学生生活の充実要因に関する一考察」『大学教育研究』, 神戸大学 大学教育研究センター, 第 13 号, pp.15-27.

- 武内清 (研究代表) 2005 『学生のキャンパスライフの実証的研究—21 大学・学生調査の分析—』平成 16~18 年度文部科学省研究補助金 (基盤研究 (B)) 中間報告書.
- 武内清 (研究代表) 2007 『現代大学生の生活と文化—学生支援に向けて—』平成 16~18 年度文部科学省研究補助金 (基盤研究 (B)) 最終報告書.
- 武内清 (研究代表) 2009 『キャンパスライフと大学の教育力—14 大学・学生調査の分析—』(平成 19~21 年度文部科学省研究補助金報告書).
- 武内清 (研究代表) 2010 『大学の「教育力」育成に関する実証的研究—学生のキャンパスライフからの考察—』平成 19~21 年度文部科学省研究補助金 (基盤研究 (B)) 最終報告書.
- 全国大学生生活協同組合連合会広報調査部編 2012 『バブル崩壊後の学生の変容と現代学生像』.